

平和がまいりますように Shalom

◆再度の離婚

アン・ブーリンはこの時点ですでに妊娠中であったが、生まれた子はヘンリーの期待にそぐわぬ女兒(のちのエリザベス一世)であった。その後アンからは子が生まれず、ヘンリー八世の心は彼女から離れていき、今度はアンは侍女であるジェーン・シーモアに心変わりしていった。また、アンが政治に介入してくることを快く思わぬ人々が少なからずおり、それらの人々はキャサリン・オブ・アラゴンやその娘メアリーを支持するという形でアンへの敵となっていた。

一五三六年、妊娠していたアンは男児を流産したが、その直後にアンは反逆や姦通の罪に問われ処刑された。(この裁判の正当性は疑問とされている。)その翌日、ヘンリー八世はジェーンとの婚約を発表し、二週間

後に正式に結婚した。

一五三七年、ジェーンは待望の男子エドワードを出産するが、産後の容態が悪くそのまま死去した。

その後もヘンリー八世はアン・オブ・クレヴズ、キャサリン・ハワード、キャサリン・パーの三人の王妃と結婚し、一五四七年に死去した。当時九歳であったエドワードが王位を継承し、エドワード六世となった。



アン・ブーリン

◆イギリスの宗教改革

ヘンリー八世はもともと宗教的には保守的な立場であり、ローマ教皇より「信仰の擁護者」という称号を授けられたほどであった。(現在でもイギリス国王の称号の一つとして用いられている。)すでに述べたとおり、イングランド国教会がローマ教会と袂を分かったのはヘンリー八世の離婚問題が理由であり、教義的な対立からではなかった。

大陸の宗教改革の流れはイングラ

ンドにも様々な形で伝わってきいてたが、ヘンリー八世のこのような姿勢から、彼の存命中は表だった改革の動きはなかなか表面化しなかった。しかし彼の死後、抑えられていた改革者たちは自由を得、様々な改革が実行に移された。

■ 聖公会の始まり ■

司祭 ダビデ 市原 信太郎

『国王の離婚でできた教派? ②』

一五四九年に承認された「第一祈祷書」は、ある種妥協の産物とも言えるもので、従来の礼拝様式に宗教改革的エッセンスを加えた、という印象が強いが、その三年後に公布された「第二祈祷書」は古い要素の多くを廃し、宗教改革的性格が鮮明となった。弾圧を恐れて大陸に亡命していた多くの聖職者・神学者も帰国し、イングランドでの宗教改革がいよいよ進められるように見えた。



エドワード6世

エドワード六世の在位中は、年少であることもあり、摂政となったサマセット公(エドワードの母ジェーンの兄)、そして彼を追放した後にその地位を得たノーサンバランド公によって実質的には運営されており、宗教改革が進められたのは彼らの意図に寄るところも大きい。特にノーサンバランド公は、宗教的信念というよりも政治的意図からプロテスタント的改革を急速に推し進めていた。ところがもともと病弱であったエドワード六世は、一五五三年、わずか一五歳でこの世を去った。ノーサンバランド公はエドワード六世の死後、自分の息子をヘンリー七世(八世の父)のひ孫に当たるジェーン・グレイと結婚させ、彼女を即位させて影響力を維持することを考え、病床のエドワード六世にそのように遺

言するよう迫った。しかし議会はこれを認めず、キャサリン・オブ・アラゴンの娘メアリーが即位して、メアリー一世となった。



メアリー1世

メアリーはもともとスペイン出身の母を持ち、カトリックの信者であった。また、自身や母キャサリンを様々な形で苦しめた多くの人々に対する恨みに満ち満ちており、即位の翌年にはローマ教会への復帰を決め、またヘンリー八世のために便宜を図ったり、宗教改革を進めたりした多数の聖職者や貴族たちを次々と処刑した。その数はおよそ三百と言われる。(そのため、彼女は「ブラッディ・メアリー」というあだ名で呼ばれるようになり、現在ではカクテルの名前ともなっている。)

このような弾圧に加え、メアリー一世はスペイン王子フェリペ二世と

結婚し、それによってイングランドがスペイン対フランスの戦争に巻き込まれるに至って、国民の心は完全に彼女から離れた。失意のうちに、メアリーは子を残すこともなく一五五八年世を去った。

エリザベスの宗教解決

メアリーに続いて即位したのは、ヘンリー八世の二番目の妻アン・ブーリンの娘、エリザベスであった。彼女はメアリーの反動改革を離れ、再度国教会体制を継承することにより、国の安定を図った。その一方で、第二祈祷書をよりおだやかな形に再度改訂し、新旧の両要素の調和が企図されている。

また、イングランド教会の信仰的立場の表明と言うべき「三十九箇条」を一五六三年に制定し、そこには現代まで継承されてきた聖公会の特徴とも言うべき「中道」が示されている

※この原稿は、市原司祭が立教池袋中高の『PTA会報』2015年3月号(第136号)に寄稿されたものを、「自身で改稿いただいたものです。」

ると言える。端的に言えば、急進的なプロテスタントイズムに距離を置き、大陸の宗教改革を英国教会として再解釈する一方で、カトリシズムを単なる教皇中心主義とせず、古来より継承されてきた信仰として再確認するという、この両者を合わせた道を歩むという精神がそこにある。



エリザベス1世

エリザベス一世の時代に成し遂げられたこの宗教政策は、「エリザベスの宗教解決」と呼ばれる。聖公会の持つ、「プロテスタントとカトリックの中間のような教会」という特徴の大きな理由は、このような成立の歴史に見いだすことができる。

おわりに

聖公会に関して「国王が離婚したくて教派ができた」ということが歴史的事実である一方、ここに留まる

のは歴史の表面的な見方であるといふこともお分かり頂けたであろうか。それにしても、結果としてこのような中から誕生した教派の流れに立教が属していることを考えると、「神はあらゆることを用いて働かれる」という思いを強く持たざるを得ないのである。(完)

<巻頭言より>

『疲れた靴』 高石ともや

- 君は長い道のりを歩いてきた、つらい言葉を浴びせられて泥にまみれて足も重い、でも罵る者は皆背中を向ける
※(くりかえし) 疲れた靴を脱いで休んでゆかないか
笑い話をしてあげようか
君の瞳は輝いている、憧れと夜明けを求めながら
- 少女の笑顔に君は笑う、微笑みの輪が広がるように人々の声も沸き起こり、錆びた扉は崩れ始めた
※(くりかえし)
- 自由の行列は町を進む、囚われの輪も崩れ始めた
そうさ君の歌は消えはしない、君はまた虹を追って旅にでる
※(くりかえし)